



編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472) 22-7171内線2012

千葉大学医学部同窓会報 第69号 題字 鈴木五郎

佐藤 博教授(昭20卒)

附属病院長に再選

三月三十一日をもって任期満了となった医学部附属病院長には、第二外科の佐藤博教授が再選された。去る二月二十六日午前中に予備選挙が行われたが、投票数二二二票(投票率八〇・七%)と高率の投票成績で関心の大きさが示された。同日午後の教授会にて二名の候補者につき本選挙が行われた結果、前記の如く佐藤病院長の再選となった。新病院完成移転を担当した佐藤院長がさらに二年間在任する意義は大といえよう。

病院長再任にあたり

病院長 佐藤 博

昭和五十二年四月に前病院長久

堀越 達郎教授(歯科口腔外科学)

退官記念式典挙行される

四月一日付をもって定年退官された堀越達郎教授の退官記念式典が三月二十四日午後、医学部記念講堂において盛大に挙行された。昭和三十八年に助教として本学に來られ、昭和四十一年七月に教授に昇任され、大学紛争を間においた困難な時期に各種の要職を果されてよく教室の態勢をつくられた御功績は印象深い。なお四月



保教授の後任に選ばれてから、二年の歳月がすぎました。その間新病院への移転並びに設備とそれにもなう予算要求などが私の主な仕事であった訳です。五十三年の三月一日から新病院での診療が始まり今月でやっと一年を経た事になります。初め新しい披に、

以降、札幌に近い東日本学園大学歯学部附属病院長として御活躍中である。
退官にあたり
堀越 達郎
昭和三十八年以来十五年御世話になりましたが、定年の申合せにより今春退官することになりました。

しい酒を充たす覚悟でいろくんと努力いたしました。幸い教職員一同の暖かい御理解と御協力とによって大禍無く今日まで来た事を心から感謝している次第です。
此の度病院長の再任にあたり、過去の一年間の経験から、今まで為し得なかった事、これから何を為すべきかと云う事を、皆様と共に考え実行して行きたいと存じます。

今後共宣敷く御指導御鞭達をお願い致します。
大禍なく今日を迎えることが出来ましたのは、一重に皆様の御理解と御協力によるものと存じ、深く感謝しております。新設歯学部の建設といたすることも、仲々大変な仕事と覚悟しておりますが、幸と元氣ですので、御期待に反しないように、万全の努力を致します。現地の寓居は、北大附属病院の反対側で、北区役所の近くに決まりました。御出張等の節は、御立寄り下さいませよう、御待ち申し上げております。終に皆様の御健勝と、千葉大学の一層の御発展を祈り、退官の御挨拶と致します。



写真は式典における堀越教授御夫妻

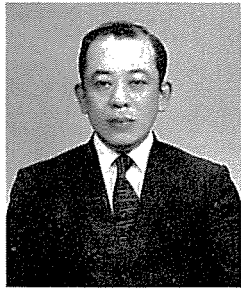
看護学部長に

石黒 義彦教授(昭24卒)

宮入看護学部長の定年退官に伴う新看護学部長には、同学部の成人看護学(第二)教授である石黒義彦氏(昭24卒)が選出された。石黒教授は第一外科の講師より同学部の教授になられた方で、修士課程の発足に際しての学部長としての活躍が期待される。

看護学部長就任にあたり

石黒 義彦



本年四月より看護学部長に就任いたしました。四月には当初よりの念願でありました大学院研究科(修士課程)の学生募集、更には看護教育学講座の増により全十一講座となり、教官数も四十六名と、少しづつではありますが看護学部としての形態を整えつ、あります。
今後は学部内教育、大学院課程の運営等に努力をかたむけるつもりであります。

卒業生と医師国家試験成績

昭和五十三年卒業式は去る三月二十三日挙行されたが卒業生は計八十五名であった。このうち十五名が他の大学等に出ている。ちなみに基礎医学教室に残った者はわずかに一名であり、近年の傾向に遂にとどめがされた感がある。
この卒業生等の受験した第67回医師国家試験の合格発表が五月十六日であったが六名の不合格者があり、合格率九二・九%であった。しかし、既卒業生十一名がこれに加わって受験し、わずかに三名の合格者を出したのみであったので本学部としては受験者九十六名中計十四名の不合格者となり、合格率八五・四%となった。全国平均は合格率七八%であった。

千葉大学のはな同窓会

会長 大塚文郎先生

他界される

謹んで哀悼の意を表します。



昭和五十四年三月七日に他界された。行年七十六才。三月十六日青山斎場において告別式がとりおこなわれた。

弔辞

本日茲に故千葉大学のはな同窓会会長大塚文郎先生のご葬儀の相営まれるに当り、同窓会を代表して恭しく弔辞を捧げて最後のお別れを申し述べたいと存じます。

大塚会長は明治三十五年四月千葉県君津郡中郷村にお生まれになり、大正十三年北大予科を経て千葉医科大学に入学、昭和三年に同科大学を卒業、直ちに陸軍軍医学校に入り、昭和六年選ばれて母校千葉医科大学に研究専攻生として派遣され、竹村、石川両教授に師事、専心研究に打ち込まれ、昭和十年、「成人肺結核症における早期浸潤の長期に亘る臨床的観察」と題し学位論文としてその成果をまとめられ医学博士の称号を授与されたのであります。

昭和十二年陸軍省医務局に入られ三木、小泉等歴代医務局長に任せ、昭和十八年九月陸軍省医務局医事課長の要職に就かれ、昭和十九年八月陸軍軍医大佐にご昇任になられました。その間医務局内十指を越える各種重要な委員会幹事、審議官専門委員の要職を歴任され、文字通り帝國陸軍衛生部の帷幄の中核にあって、その敏腕を振るわれたのであります。戦後先生が編集の責任者のお一人として出版された「大東亜戦争陸軍衛生史」は貴重な戦争資料として残されたのであります。終戦後は復員官として復員業務に専念され、その後は野にあって庶民、大衆の病める者への奉仕者として献身せら

れ、昭和四十二年現在の総合病院としての東京大塚病院を開設され院長として今日迄医人としての道を徹して歩まれて参ったのであります。このようなご経歴に示されますように先生の武人としての修業、医人としての練磨によつて培

われた偉大なご人格は、千葉大学医学部同窓会員の衆目尊敬を集めるところとなり、推されて永年東京のはな会の会長を務められ、昭和五十一年には伝統ある千葉大学のはな同窓会の第四代会長に推挙され、千葉大学医学部百年記念の諸事業の推進に陳頑指撥をとられて参ったのであります。然るにこのたび事業完遂半ばにして、志を遂げ得ないままに去られ、先生の悔心を思いますが、さぞや痛恨の極みと存せられますとも、我が同窓会にとつてもここに支柱とも仰いで参りました偉大な先達を失うことは正に堪え難い悲嘆の極みであります。一面豪放にして磊落、反面細心にして溢れる温情、美食を好み、ゴルフを楽しみ、常に一級品を愛し、破顔一笑する先生の御様子は昨日のことのように私共の脳裏に刻まれて離れません。然し今や先生を呼び戻す術はありません。私共はこの悲しみを乗り越えて突き進む以外に道はありません。

ここに改めて先生の御高德を偲びつつ、御々靈の安らかならんと切にお祈りして弔辞といたします。

昭和五十四年三月十六日
千葉大学のはな同窓会副会長
小林 金市

のはな同窓会会長

大塚文郎先生を偲んで

医学部長 井出 源四郎

先生とお別れして既に二ヶ月が経ちました。今何処で何をしておられるのでしょうか。折に触れ想い起している昨今です。考えてみますと、先生から親しく交誼をたまわるようになってからでも既に十年余りになるでしょうか。先生が同窓会副会長になられてからのことですから。以来先生からは、ほんとに胸襟を開いてのいろいろな教訓を与えられました。

とに角先生は一面豪放磊落、そして他の一面は細心にして緻密、人間として大きな人だったと思えます。日頃ご自分の若さを誇っておられ、本当のお歳を申し上げると嫌がられました。宴席などでは十も二十も若く申し上げると、それながらも大変な喜びようでした。衣食住何をとりに上げて一級品が大好きで、興出れば談論風発世情を慨き理想を掲げて自説を開陳するという先生の純心な理想家としての一面として忘れられない想い出は枚挙にいとまないところでありました。

その先生が昨年頃から目立って瘦せてこられ、秋になつてお勧めして新装なった本学の病院に、一月足らずでしたが、入院されて健康診断を受けていただいたのですが、その時既に右肺下葉気管支に



先生にとりましては、どんなにか苦しい開病の連続だったでありましょう。しかし私共にとつては先生との別離が何とも呆氣ないもので、先生にはこれからののはな同窓会はもとより、未だ未だ沢山のことでご指導いただかなければならなかつたのに、天命とは申せ惜しまれてなりません。心からご冥福をお祈り申上げるほかございません。(合掌)

安房ゐのはな会総会の記

一月二十七日、萩原教授、高見沢教授、一外科奥井講師をお迎えして、館山市料亭庄本で、三十名の会員の参加を得て開かれた。午後四時半より、新病院開院祝賀会のビデオテープを観賞し、出席予定の会員が集まった所で総会となり、会長関谷正一（大13卒）副会長安藤建治（昭9卒）幹事橋本孝平（昭17卒）小谷庸（昭24卒）柴田耕三（昭24卒）青木謹（昭和36卒）が選出された。

続いて萩原教授の学内の近況報告、奥井先生の学術講演「スウェーデンに於ける経皮経肝門脈造影について」があり、専門は違っても勉強熱心な会員が多いので興味深く聞き入り、井出医学部長が所用でお出でにならなかった無念さも忘れる程であった。質疑の

折同窓会のあり方について白幡静夫（昭13卒）会員より「折角の同窓会のきずなを、親睦というだけでなく、安房ゐのはな会員の多くが医療の理想を求めて頑張っている安房医師会病院に、同窓会本部及び千葉大学から医療の面でも強力なテコ入れを切望したい」と熱心に述べられた。

記念写真撮影の後、六時半より物故された前会長橋本鐘爾先生、名譽会員穂坂与明先生の御冥福を祈り黙祷を捧げ、懇親会となった。乾盃のあと、世界産婦人科学会の緊急委員会の為遅れてかけつけて下さった高見沢教授の挨拶があり、和氣あいあいのうちに「庄本の料理」に舌鼓をうち、時の経つのも忘れる位だった。現在の「若さ」を永遠に振っておこうと言う

昭和五十四年第一回のゐのはな同窓会常任理事会および四金会

昭和五十四年二月二十三日、三時から今年第一回の常任理事会が開かれた。議題としては役員改選についての下準備、新入会員歓迎会の予定、その他のほか、大正二年卒業生のご家族からの申し入れについてであった。この最後の項は大正二年卒の先輩、佐藤隆房、

趣向で、新病院開院祝賀会撮影のスタッフがビデオ撮影をしてくれたので、その熱気が溢れ、大汗をかき会員も出る仕末でなかなかの盛会であった。



（青木謹記）

常任理事会としては四月の四金会にお招きしようという方向となった（その後大津氏のご連絡により先輩方のご都合でこのことは沙汰止みとなった）。

同日六時から四金会があり、一般医療功労賞を贈られた白幡静夫、窪田静夫両先生のお祝い、薬理学助教として阪大より着任した門田健氏の紹介などが行なわれた後懇親が行なわれた。

なお遅ればせながら、昨年八月医学部長に就任した井出教授の挨拶もあり、相変らずご健在の鈴木五郎、小林龍男先生や、久しぶりに顔を見せられた緒貫重雄、尾本芳次先生などを囲み、二十人あまりの集りではあったが、同窓会らしい雰囲気の良い会であった。

井出医学部長御一行を迎えて

宮地 健 三（昭26卒）

一月十日新設の高知医大の視察を終られた井出医学部長、佐藤（博）病院長、木村教授、高知へ赴任の決定した田宮教授をお迎えしましたが、何分急な御連絡でしたので安中大先輩、高知女子大学学長）の御出席が出来ないまま、まや橋に近い料亭得月楼に御案内し、森山先生（昭28卒）と私（昭26卒）とでお相手を致しました。梅で有名な得月楼ですが暖冬とはいえ少しはやく梅見を楽しんで頂くことは出来ませんでした。

新しい病院の事、教授陣の御活躍、学校の近況にはじまり、戦後の学生生活の思い出等々本当に楽しい一時を過ごしました。仲居さんの伝授の土佐箸を各先生が覚えられる頃には大分お酒も入った様ですが、びくとせず、その上淡い喉まで御披露頂き、酒の強い土佐の女性が千葉の男性お見事お見事という程でした。

席を代える頃井出先生と同クラスの有里先生（昭19卒）も参加されて、卒業以来の再会を喜びあいクラス誌を有里先生も持って来られ、「これは私の編集だ」と井出先生懐しそうにガリ版のクラス誌をめくる一幕もありました。夜の更けるのも忘れた一刻でした。

いづれ高知医大に田宮、藤本両教授赴任の折は本県出の方も教室員として連れてこられる事と思いますが、現在十名のゐのはな会も

同窓会諸氏に白菊会入会を訴える

永野 俊雄

五月二十五日、常任理事会がもたれた夕方、同窓会館において本年二回目の四金会が開催されたが集った者十二、三名でいさかささびしかった。

しかし、鈴木五郎、小林龍男、相磯和嘉の諸先生はじめ東京ゐのはな会の中村会長他大先輩の顔がならび、井出医学部長以下の学内勢にとつてはむしろ印象深い会にしていただけだ。

解剖学教育のための献体運動団体である白菊会について嶋田裕君により既報の記事があり、また社会機構の変化と学生増にもない教育用遺体が全国的に不足していることは周知のことと思う。

百周年をすぎた本学はすでに同窓諸氏の第三世代の若人が入学されている現況である。今さら医学教育における肉眼解剖実習の重要性や遺体収集運動についてかくつもりはないが、解剖実習を満足にできなかったさせられなかった医師が増加することは自明のことであり、将来これがどのように影響するかと考えるのは杞憂であろうか。

易言難行なのは、困難な入試を突破した新入生に一種の義務として白菊会に入会させることである。医大卒業生はみな母校に遺体を献

じたならばこの困難な問題は自ら氷解するはずである。本学教官側でも自ら献体運動に進んで参加している人は多くないのが現状であるが、同窓会諸氏や関係者におけるは後輩のため、さらにはよりよい医師育成のため白菊会に参加されることを強く希望するものであります。この会はその名のよう

に会員は何の恩典にも浴しません。ただ医学教育のために献体を希望するものの集りであり、最後に白菊会千葉支部の斎藤利一氏の詠をもつて筆をおきます。

「何時の日か医学のために捧ぐ身の友の幸せ折る日々」

筆者は（昭和30年卒、白菊会会員、解剖学教授）

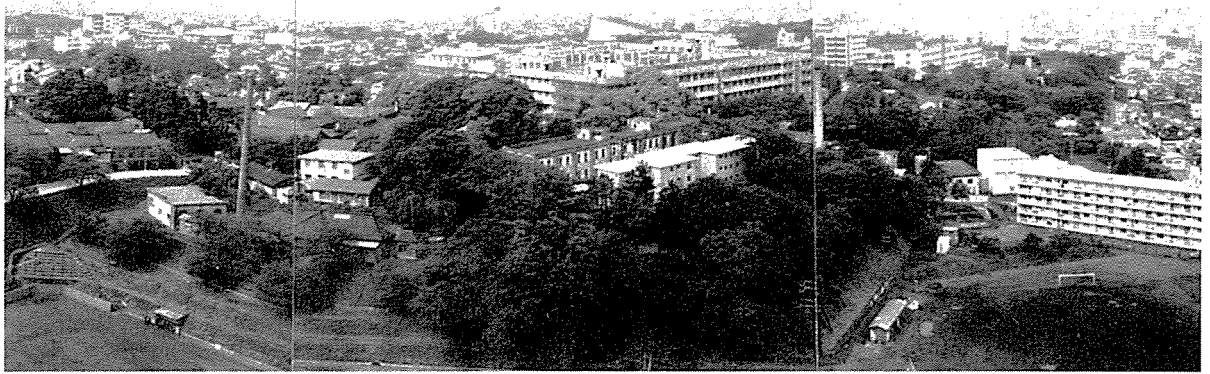
白菊会千葉支部・0472・22・7171 医学部庶務係内。

五月の四金会

教育研究棟として改修中の旧病院

看護学部

基礎医学棟



↑ 野球場

↑ 旧精神科

↑ 新学生寮

↑ 職員宿舎

ロスアンゼルスより

松本 生 (昭36卒)
浅井利夫 (昭44卒)

「かつて、これほど少数の人々から、これほど多数の人々が恩恵を蒙ったことはなかった。」

これは、第二次世界大戦でドイツの爆撃からロンドンを守ったイギリスの戦闘機パイロットに対して、チャーチル首相が贈った言葉だが、この言葉が更にびつたり当てはまる場面が今ここにある。こゝとは、アメリカ西海岸ロスアンゼルスだ。

学問の世界的な交流が盛んになるにつれて、わが「るのほな同窓会」の関係者でアメリカを訪れる人々の数は益々増加している。

ある人は学会に出席するため数日間をアメリカで過ごし、ある人は研究のため此の地に腰を落着けて滞在し、というように目的はさまざまであるが、このロスアンゼルスはサンフランシスコと並んでアメリカへの日本からの玄関の役を果たしているから、アメリカへ来た人が大抵は足跡を残していく場所になっている。

たしかに地球は小さくなった。しかし、近くなったとは言えアメリカは矢張り外国であり、日本からいきなり来てみれば、習慣の違い言葉の違い、さらには食物の違いなど戸惑うことも少なくない。もし、この地に全く手がかりもないとすれば、これは砂漠に一人で

踏み込むような不安を持つ人がいても不思議はあるまい。

ところが、この砂漠の旅人達に長年にわたってオアシスの水を分け与えてきた人がいるのだ。御存知の先生方も多数いらっしゃると思うが、あえて名前を出さずしていただければ、それはカリフォルニアの大地にがっちり根をおろして開業しておられる第二外科出身の小川先生である。

ロスアンゼルスダウンタウンからフリーウェイで二十分たらず、緑に囲まれバームの並木が続く、サデナの美しい住宅街に先生の自宅はある。ダウンタウンのスモッグもここまでは流れてこない。透明な空気と青い空と明るい陽光に満ちたカリフォルニアの自然がここにはある。散水器が虹を作っている芝生に続く玄関を入つて、リビングルームに通された人は、そこに何冊も積み上げられたノートブックを開いて驚きの声を上げるに違いない。そこには、ここを訪れた人々の名前が連綿と書き連ねられていて、ノートは終戦後までもなくの昭和二十八年から始まり、今年分まで何冊にもわたつて続いている。そしてまた、小川先生御一家から受けたものでなしに對する感謝が、さまざま表現で書か

れている。

もし、これだけ多くの人々がお世話になった場所が千葉周辺にあったならば、とつくに感謝状の一枚くらいは贈られていたところかも知れない。

ところで、この小川先生の影にかくれているが、もう一人忘れてならない人が居る。南カリフォルニア大学のスタッフとしてアメリカ医学の中核に千葉学派のくさびを打込んで活躍している石川行一先生だ。

南サデナの丘の中腹の別荘風の洒落た邸宅は日本からやつてくるドクター達から日本大使館よりも数倍も頼りにされている。ロスアンゼルスに住んだ人は勿論、ほんの一日か二日滞在した人でも、石川先生から骨身惜しまぬ援助を受けた人はおびただしい数にのぼるだろう。

このような日本から遠く離れた地における「るのほな同窓会」の会員の功績は、知る人ぞ知るであるが多くの人々の目には触れない。筆者達も、当地にくるまでは全く知らずにいた。しかし、遠く日本を離れたカリフォルニアで「るのほな同窓会」ならびに千葉大学の発展に大きく貢献している先生方の活躍をまのあたりに見て、今更のようにその重みを感じずにはいられない。

先生方は、このようなことを書かれることを好まれないかも知れない。むしろ迷惑と感じられるかも知れない。しかし、かつて「るのほな同窓会報」の編集部に籍を置き、情報は必ず万人に知らせることをモットーとしてきた筆者両

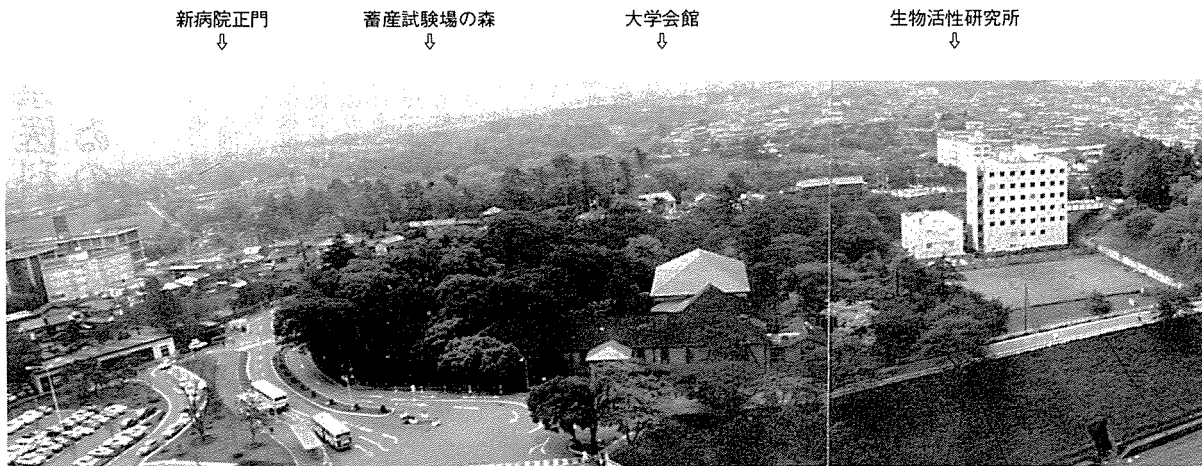
名が、偶々ロスアンゼルスに同時に住むことになったのが運のつきと考へて、お許しただくことにしたい。

松本 生 (昭和36年)
埼玉医大小児科講師
南カリフォルニア大学
メデイカルセンター内分泌セクション留学中
浅井利夫
東京女子医大第二病院
小児科講師
南カリフォルニア大学

ロスアンゼルスチルドレン
ホスピタル循環器科留学中
(連絡先)
Dr. S. Matsumoto
322 N. Mariposa Ave.
Los Angeles, California
90004
U.S.A.

旧病院の改修一部完成

教育研究棟として改修中の旧病院の工事は順調にすすみ、南東の一角(二階でいえばもとの二外科病室の一角)の改修が五月一杯で完成した。六月四日より十一日までの間に、旧病院内に居残つていた臨床各研究室、教授室等はすべてこの改修成つた四分の三の一部分に一時移住し、残り四分の三の改修が開始された。来春にはすべての工事がおわる予定であるので、それまでの一年余りを手狭ながらこの四分の一部分ですすむことになる。前号でも触れたように、来年夏頃には基礎教室もここに移り、教育、研究のすべてがここにすすめられるようになる。



新病院屋上より南の方をみる

(金子教授提供)

もぐら会(昭23卒) 卒業三〇周年クラス会

戦争中に入學、授業中しばしば空襲警報が鳴り、防空壕に待避して、高空を行く妙にキレイなB29を眺めていたゆえをもつて「もぐら会」から最近五年間の(なんと卒業二五年を祝ったクラス会——昭和四八年から今まで開かれていなかった!)学内状況の、せん、およびその間の同窓の異動等について簡単な紹介があり、ついで物故された先生ならびに安西、石崎、河野、富安、二宮五君の靈に黙祷が捧げられた。



ご出席の先生の中の最長老である鈴木五郎先生のご発声で乾盃、ひきつづき各先生のお話をうけたまわることになったが、今回はこれに多少の趣向をこらした。すなわち、各先生にゆかりのある者が、あの頃の先生について思い出を語り、それに引きつづいて先生のお話をうか

ら会」と名付けられたわがクラスも、卒業三〇年をけみし、去る三月十日、市内ほいでい屋で記念のクラス会を開催した。集った同級生四十八名、お招きした先生でこ来会下さった方六先

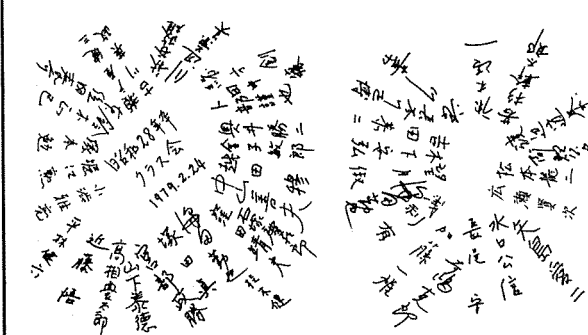
生。予定の午後四時をわずかに越した頃には、すでにほぼ全員が集まり、まず萩原の司会で開会。吉田(亮)から最近五年間の(なんと卒業二五年を祝ったクラス会——昭和四八年から今まで開かれていなかった!)学内状況の、せん、およびその間の同窓の異動等について簡単な紹介があり、ついで物故された先生ならびに安西、石崎、河野、富安、二宮五君の靈に黙祷が捧げられた。

がうという形式にした。発言順につきのとおりである。
山本(震)——竹内勝先生、萩原——小林龍男先生、大西——松本——相——柴田・小林(康)——相——磯和嘉先生、奈良——北村武先生吉岡(宏)——鈴木五郎先生。
なにしろ三〇年の時間の空気があることであり、記憶にいまいな所があったりするものが結構おもしろく、会場に笑声が絶えなかつた。その後は五年ぶりにつもる話

昭和28年卒クラス会

昭和54年2月24日、菊町会館(千代田区平河町)で、昭和28年卒クラス会を開催した。今回は窪田靖夫君が富山医科薬科大学眼科教授として、四月より赴任されることと、木下安弘君が先頃千葉大学教授に昇任されたこと、の祝賀会を兼ねて、開催した。写真の寄書の諸氏43名が参会し、盛会であった。我々のクラスの諸兄も年令、大かた50才を越し、社会的にも医師会長その他の要職につき、各方面に活躍している。変った処では大石益光君は静岡新聞社長・静岡放送・テレビ社長・静岡商工会頭などを兼務しており、その合間に婦人科医もしている。また二

の花が咲き、あらかじめ先生方に染筆していただいた色紙に寄せ書きをするなど、時の経つのを忘れる和やかで賑やかなクラス会であった。
今後はできれば昔のように毎年クラス会を開く方向に進みたいというので、来年度は長野(幹事小西)で開催することに決めた。当日の幹事は石川(潜)、吉田(亮)、山口、萩原の四名であった。(萩原弥四郎記)



東京医科歯科大学

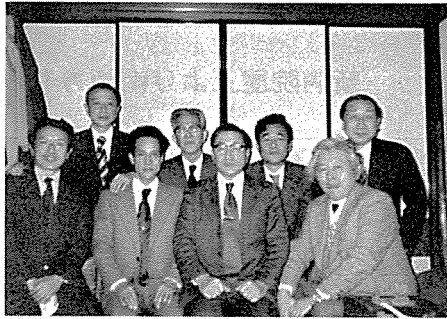
るのほな同窓会近況

窪田 金次郎

新島迪夫教授逝去後しばらく開かれていなかった同窓会が、飯田静夫教授(昭34卒)が二月から医学部第二生化学教室に赴任されたのを機会に歓迎会を兼ねて、三月七日ひさかたぶりに開かれた。万世橋界隈にある「ぼたん」という鳥鍋料理屋で炭火に煮える肉をつつきながら歓談した。近況を簡単に紹介する。

医学部では、加納六郎教授(医動物・昭20卒)が現在医学部長を務めておられ、先年、中近東を視察中、爆破事件に遭遇し、左鼓膜器官を完全破損し、片耳で奮闘中である。都合の悪いことは聴えぬ振りして、うまくやっている。前田博教授(公衆衛生・昭19卒)は大学将来計画委員長として難問をかかえ込み苦闘している。石塚慶

次郎講師(第二外科・昭28卒)は同窓会の庶務をやってくれている。歯学部では窪田金次郎教授(解剖・昭23卒)が歯学界では唯一の研究機関である顎口腔総合研究施設の施設長として、総合研究所構想の実現をめざしている。山崎眞隆技官(薬学・昭19卒)が歯学部附属病院の薬剤部長として活躍されている。難治疾患研究所には、農村医学の權威・柳沢文徳教授(疫学・昭16卒)が研究所長として複雑な問題をかかえながら頑張つて



山崎 眞隆
窪田 金次郎
鈴木 文男
加納 六郎
前田 博
飯田 静夫
村松 敏夫
石塚慶次郎

おられる。鈴木文男助教(循環器病・昭24卒)が活躍されている。教養部には、村松敏夫教授(化学・薬学・昭29卒)がおられ、入試採点の最中を出席された。一同記念撮影をして、秋には、学内・外で活躍されている医歯大るのほな同窓生全員が集合することを決めて散会した。(筆者は解剖学教授、昭23卒)

卒業五十五周年記念

三橋 佐久司(大14卒)

私達は大正十年四月千葉医専入学、大正十四年三月卒業、今年で丁度五十五周年を迎えることになりました。

昭和三十五年からは毎年三、四月の級旅行をやっています。独り級員丈でなく奥様も御嬢様の一部も参加して大変にぎやかでした。

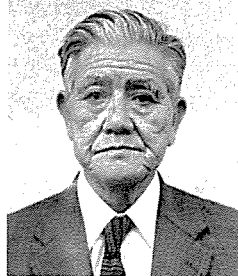
級友も年々減じ生存者三十四名となりました。出席した級友は大川録郎・中路三平・鮎沢要・大西長藏・大屋正夫・海宝仁・鈴木藤吉・白川初太郎・中島紀一・長谷川文博・東泰一・堤丈夫及び三橋佐久司の十三名の諸君でした。尚、今後其一年一回の旅行は続けたいものです。四年前には箱根及び修善寺へ泊り翌朝一時間位修善寺で法事をやりました。未亡人の方達も気持ちよく参加してくれました。

四国大会参加者氏名

(敬称略)

朝山とみー伊藤育子ー藤井うた子、鮎沢要、上桒ますえー荻神代、大西長藏ーさき子、大屋正夫ー光子ー倉持洋子、海宝仁ー智枝子、御供キヨ、栗原とみー下村やす子、三橋佐久司、鈴木藤吉ーキヨ、白川初太郎ーふゆ乃、中島紀一、長谷川文博ーれん、東泰一ー恰江、山内恵ー千恵子、中路三平ーとし子、大川録郎ー貞子、堤丈夫
以上三十三名

国保国吉病院 開設30周年記念式典開催さる



齊藤弘国立千葉病院長・長井和行 県衛生部長等多数出席され、盛会を極めた。



創業之旗既往矣 守戒之辭方興 諸公慎之

乙未四月九日書 野

編集後記

『傍観者には自己の歴史がない。』(P・F・ドラッカー)

●二年余り休刊していたこの同窓会報の再建を指令されて第57号として再刊したのは昭和51年2月29日号であった。その編集後記に私は「まさになりふりかまわず発行しなければならぬ」と書いたがそれから本号で十三号、九三年半の日時が過ぎた。もう誰がやっても年四回の発行はできるところまでもって来た筈で、私もあるいは本号で編集長の座を降りることになるのかも知れない。

●いつもささぎと原稿をまとめてくれた萩原教授、多忙の中をよく会議に出席された国立千葉病院齊藤院長、貴重な写真に配慮しつづけてくれた金子教授、実にしばしば速報をよせてくれた奥井講師、着実に編集仕上げに協力下さった増田講師にはお礼の申し上げようもない。また私を終始心からたすけてくれた教室の中島初枝嬢の努力にも感謝を捧げたい。

●再刊第57号には新任の大塚会長の写真をかかげた。そして本号にはそれに黒い枠をつけなければならなかった。悲しい思い出となった。御冥福をお祈りする。

●この会報は四六〇部発行している。同窓会費納入者はその半分である。全員が一緒に歩いて、その中で自分自身の歴史もつくり書きのこしてほしいと思う。(村山 智)